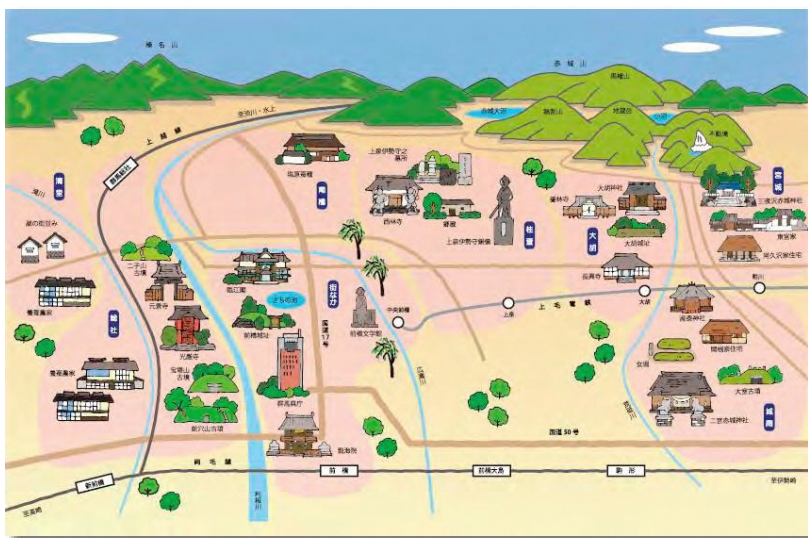


第2章

維持向上すべき歴史的風致

前橋市における歴史的風致の考え方

本市の歴史まちづくりのベースである「歴史文化遺産の活用」の取り組みでは、平成 25～28 年度（2013～2016）にかけて、2 期に渡る「歴史文化遺産活用委員会」が設置された。その委員会活動の一つとして、市内に存在する歴史文化遺産の中で、「最初・一番・唯一」に該当するものを発掘する「オンリーワン型歴史文化遺産調査」が行われた。市内の歴史的風致の設定に際しては、まず、この調査結果を基本にすることとした。

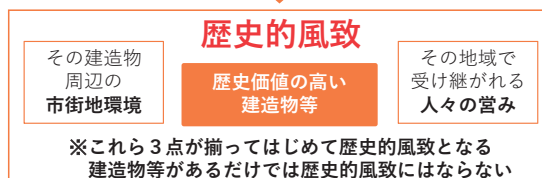


第2期歴史文化遺産活用委員会提言書「歴史空間マップ」

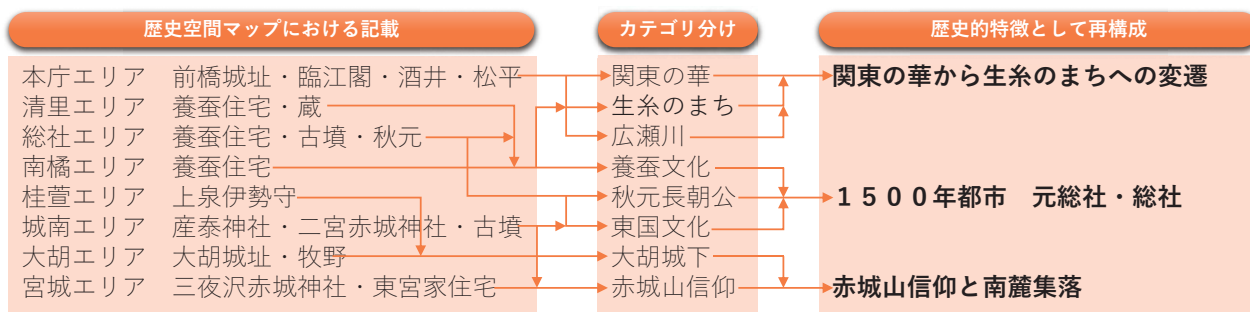
一方、歴まち法では、歴史的風致の適用要件として、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動」と、「その活動が行われる歴史上価値の高い建造物、及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた市街地の環境」があることが示されている。つまり、歴史的建造物が存在しているだけでは歴史的風致とはみなされない。

そこでまず、上記のオンリーワン型歴史文化遺産調査を基に、本市を象徴する歴史観でカテゴリ分けを行った。次に、指定・登録文化財のほか、歴史性のある建造物や伝統行事をすべてピックアップし、オンリーワン型歴史文化遺産と組み合わせ、歴史的風致の3要件に適合する「まとまり」を検討した。その結果、浮かび上がったまとまり＝歴史的特徴を本市の歴史的風致として設定した。

①左記のマップに記載された歴史的資源をベースに前橋を象徴する歴史・地域特性でカテゴリ分け



②各カテゴリに関して、歴史的風致3点セットの有無を考慮し、前橋を象徴する歴史的特徴として再構成



歴史的風致の分布

Ⅲ 赤城山信仰と南麓集落にみる歴史的風致

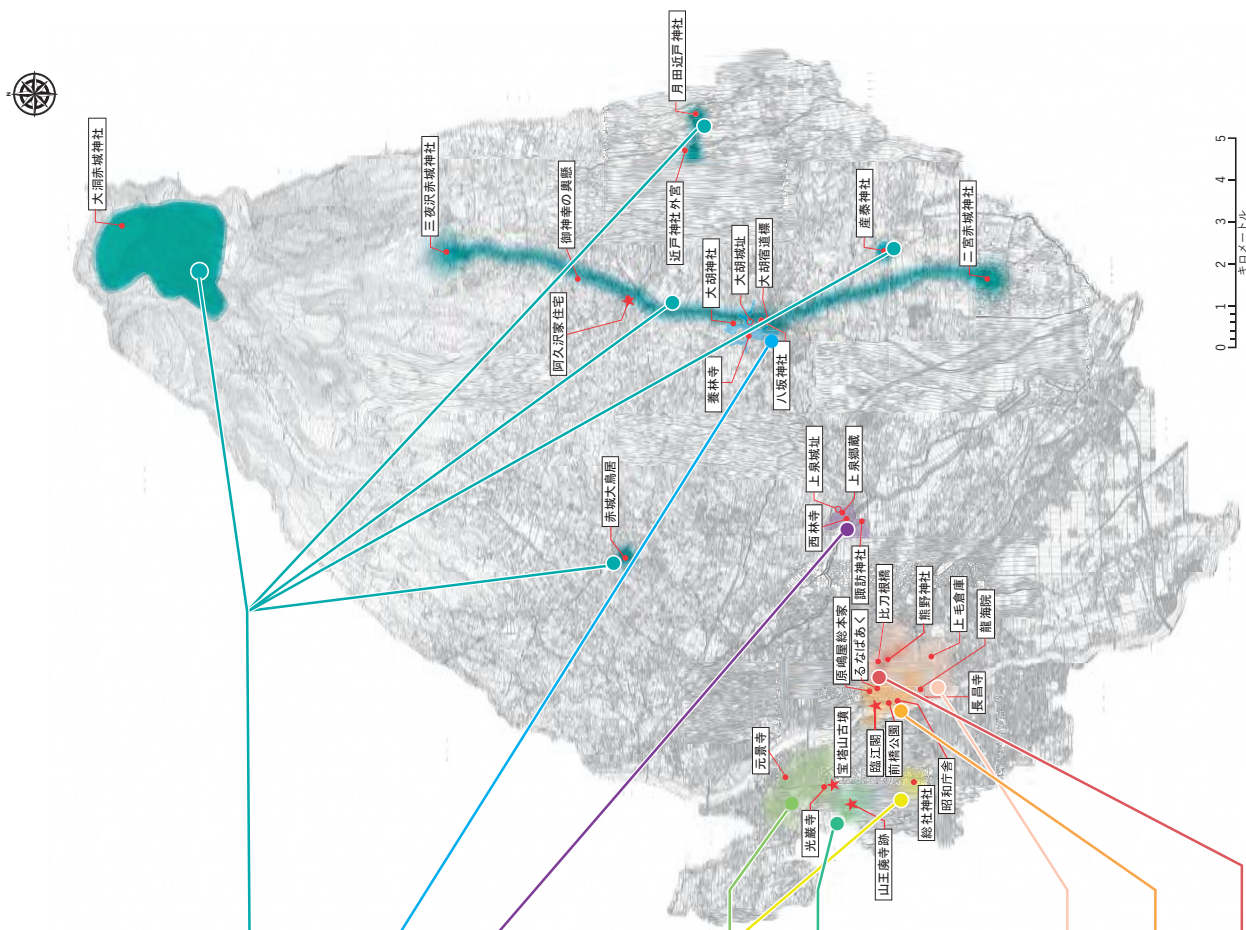
歴史的風致	建造物	営み
1 赤城山信仰にみる歴史的風致	大洞赤城神社、三夜沢赤城神社、二宮赤城神社社地、月田近戸神社、産泰神社など	御神幸、山開き、月田のささら、産泰神社太々神楽
2 「大胡暴れ獅子」にみる歴史的風致	大胡神社、八坂神社 その他街並み建造物	大胡の暴れ獅子
3 剣聖「上泉伊勢守」の顕彰活動にみる歴史的風致	上泉城址、諏訪神社、上泉郷蔵	「剣聖」のふるさとづくり

Ⅱ 「1500年都市 元総社・総社」にみる歴史的風致

歴史的風致	建造物	営み
1 総社神社の祭礼にみる歴史的風致	総社神社	上宿の獅子舞 元総社成人会盆踊り
2 総社地区の歴史顕彰活動にみる歴史的風致	光蔵寺、力田遺愛碑 元蔵寺、天狗岩用水、古墳群など	「歴史の宝庫」を形成するための活動
3 総社山王地区の養蚕集落にみる歴史的風致	個人の養蚕農家建築	かしぐねの維持管理 年中行事

Ⅰ 「関東の華」から「生糸のまち」への変遷にみる歴史的風致

歴史的風致	建造物	営み
1 街なかの伝統祭礼にみる歴史的風致	前橋八幡宮、熊野神社 その他街並み建造物	初市まつり、前橋まつり
2 前橋公園の花見にみる歴史的風致	前橋公園、原嶋屋、臨江閣 その他街並み建造物	花見と焼きまんじゅう
3 シンボルとしての広瀬川河畔にみる歴史的風致	比刀根橋、柳橋、交水堰 その他街並み建造物	空襲慰霊、美しい河畔づくり 「詩のまち」イメージづくり



I 「関東の華」から「生糸のまち」への変遷にみる歴史的風致

【街なかにおける歴史的風致の概要】

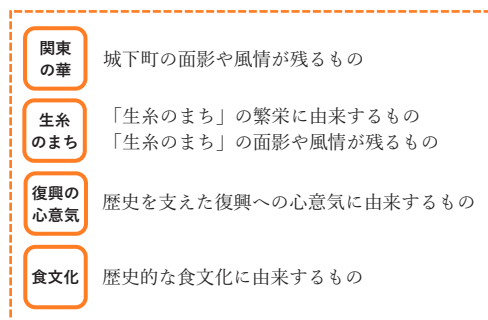
現在の暮らしにつながる本市の歴史を紐解くと、

- ① 「関東の華」が前橋の誇りを生み、育んできた
- ② 誇りを取り戻すために城再建を目指した
- ③ 養蚕・製糸を支えた商人、町人の力で城を再建した
- ④ 城が再建されたから藩を復興することができた
- ⑤ 城を再建した想いが県都の誕生を導いた
- ⑥ 「生糸のまち」の経済力と意識が県都の繁栄をもたらした
- ⑦ 県都としての誇りがあったからこそ、経済恐慌を乗り越え、戦後復興も迅速だった

というロジックが成立する。つまり、本市の歴史を大局的に俯瞰すると、各時代の相関性が極めて強く、歴史が複層的に折り重なっていることが分かる。

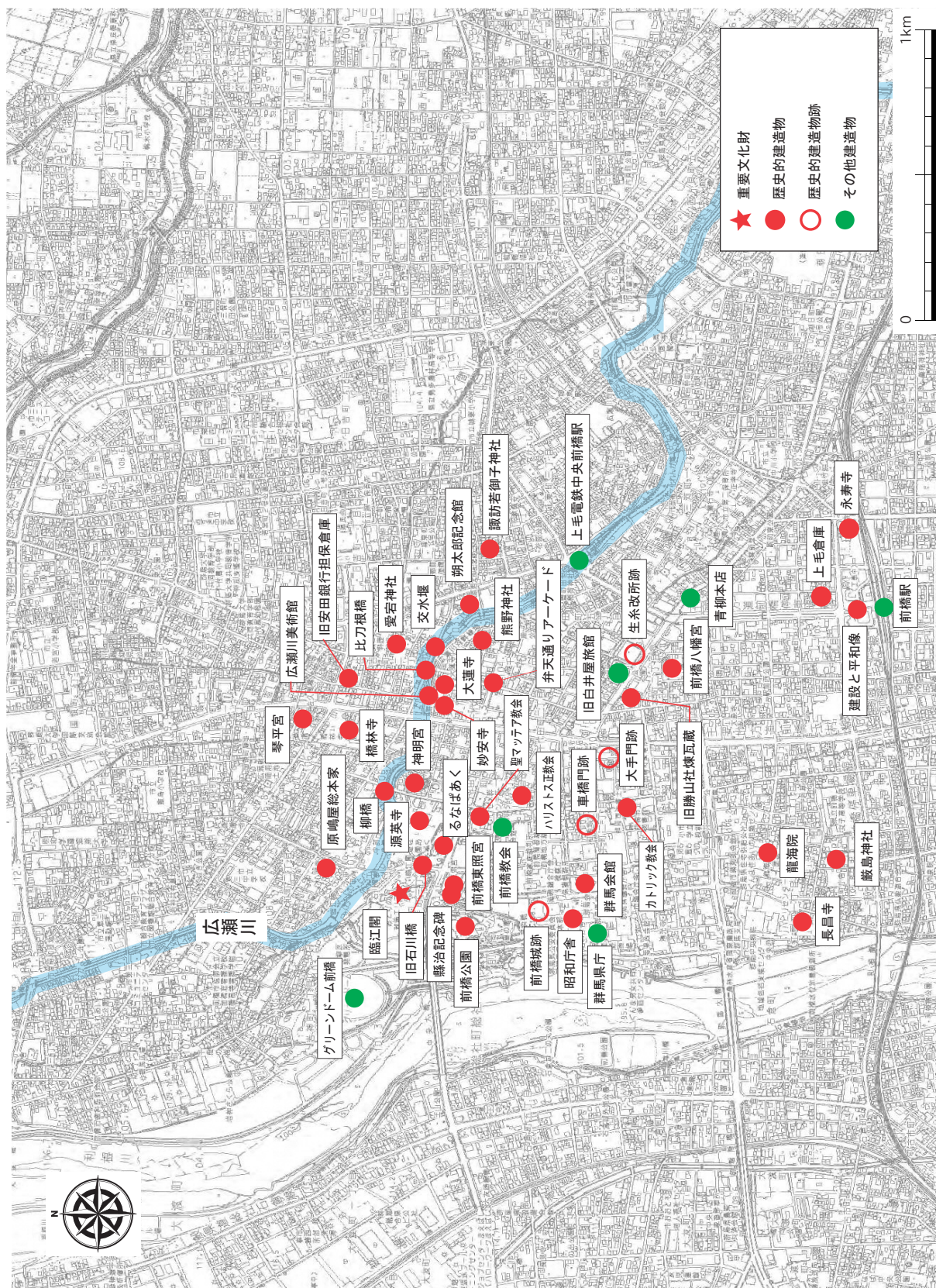
また、本市の中心市街地と称されるエリアに関しては、すでに都市化が進んでおり、規模の大きな歴史的建造物としては臨江閣や前橋城の土塁、寺社、教会が見られる程度であるが、落ち着きと風格のある街並みは「前橋らしい」と評されることが多い。実際にまちを歩くと、城下町の面影や「生糸のまち」の風情、復興に尽力した先人たちの足跡等が至る所に点在していることに気づく。

そこでまず、中心市街地エリアにみられる前橋らしさがどこからくるのか、歴史的風致の定義からその源泉に迫ることとした。この際、本市の歴史は各時代の相関性が強いという事実を考慮し、一般的な事例にみられる「特定の時代を背景とする歴史的風致」ではなく、「江戸初期から近現代までの変遷」という大きな時間的な流れを捉えた歴史的風致とした。さらに、各歴史的風致を構成する要素を上記カコミのアイコンで表示した。



区分	主なできごと
関東の華の誇り	1603 前橋藩成立「汝に関東の華をとらす」、譜代筆頭・酒井雅楽頭家が藩主を務める 「前橋の誇り」の始まり 、9代150年の統治で関東の華にふさわしい15万石の城下町へ 1749 度重なる利根川の城地内への浸食、酒井家の転封、名門・松平大和守家の入封 1767 松平家川越へ転封、 前橋城取り壊し（第一の危機） ・川越藩の分領・陣屋支配（1769） 藩主不在の時代に突入、屈辱の意識から復興を目指す歩みが始まる
屈辱の意識からの復興 ～誇りを取り戻す軌跡～	1817 川越藩主8代斉典へ帰城嘆願書提出、11代直克が幕府へ再築内願書提出（1861） 1867 100年ぶりに 前橋城再築・藩復興 、しかし半年後に大政奉還・王政復古の大号令 1870 日本初の器械製糸を導入した藩営前橋製糸所が開設 1871 廃藩置県の布告（第二の危機） 、第一次群馬県成立・県庁は高崎へ 再び都市消滅の危機、「前橋の誇り」を取り戻すための運動＝県庁誘致を開始
県都の繁栄 ～県都前橋生糸の市～	1881 前橋二十五人衆らの活躍により 県庁を前橋に決定する太政官布告 が発出される 1885 臨江閣本館落成、初代利根橋架橋・線路を現在の前橋駅まで引き込み 1892 市制施行、多大な功績を挙げた生糸商・下村善太郎が初代市長に就任 1910 臨江閣別館落成、一府十四県連合共進会開催「昼夜空前のにぎわい」の報道 廃城の屈辱から140年、 失われた誇りを「県都の誇り」として取り戻した 1930 昭和恐慌が製糸業を直撃（第三の危機） 、民間経済団体を中心に産業構造の転換を図る 1945 前橋空襲（第四の危機） ・市街地の8割が焼失、再び都市再建へ
焦土から水と緑と詩のまちへ	1948 復興祭（後に前橋まつりに改称） 1950 前橋駅前通りにけやきを植樹、全国に先駆けて 戦災復興完了 （1953） 1982 前橋市市民憲章制定、 水と緑と詩のまちとしての歩みをスタート

街なかにおける歴史的建造物等の分布



1 街なかの伝統祭礼にみる歴史的風致

関東
の華生糸
のまち復興の
心意気

食文化

(1) 街なか伝統祭礼の概要

酒井氏が藩主を務めた 150 年間（1603～1749）に前橋の城下町は大いに栄え、^{ほんまち}本町・^{れんじやくちよう}連雀町・^{たつまち}豎町は多くの人が行き交う前橋の本道であったという。その後、藩主不在の 100 年（1767～1867）の間に城下町は著しく衰退したものの、幕末に藩主松平氏の帰城が決定すると、藩士らも続々と前橋へ戻り、城の南に屋敷が割り当てられた結果、城下町は酒井氏時代の 3 倍の規模となった。間もなく明治維新を迎え、県都となった前橋の発展は著しく、製糸業の隆盛も相まって、それまで人家まばらな脇道であった^{よこやま}横山町・^{ちよう}紺屋町・^{こんやまち}榎町が前橋の「花まち^{さんかちよう}三ヶ町」と呼ばれる賑わいを呈していった。（出典：昭和 56 年（1981）「我がふるさと」）

明治 40 年（1907）の「前橋繁昌記」によると、当時の中心商店街一帯には八幡宮・連雀町八坂神社・横山町八坂神社・東照宮・雷電神社・熊野神社・神明社（神明宮）など、数多くの神社があった。このうち連雀町八坂神社は、城下町時代の中心地であった連雀町の鎮守で、初代藩主の時代に始まったと伝わる「^{はついち}初市（だるま市）」を司る市神が祀られているうえ、夏の^{てんのう}天王まつりは前橋随一の大祭典である「^ぎ祇園祭礼」として名を馳せた。一方、横山町八坂神社は、明治に入ってから栄えた花まち三ヶ町の鎮守で、明治 31 年（1898）の境内拡張を契機に、当時の^{かりゅうかい}花柳界で信仰を集めた「^{とりいち}酉の市」を始めることとなった。そのほかの各神社では、秋の例祭にて神輿を奉じて町を練り歩くのが恒例であったとされる。こうして、正月の初市、夏の祇園祭礼、秋の神輿渡御、年の瀬の酉の市は、前橋の四季を彩る風物詩として多くの人でにぎわった。

その後の紆余曲折を経て、現在、初市は本市の年中行事である「初市まつり」として受け継がれ、酉の市は地元商店街により「^{おおとりさい}大酉祭」として継承されているが、祇園祭礼と各神社の神輿渡御は、昭和 20 年（1945）の前橋空襲でいったん途絶えている。しかし、戦後復興を目的に始められた「復興祭」が「前橋まつり」に名称変更となった昭和 34 年（1959）、市民からの強い要望により、祇園祭礼と神輿渡御の一部が前橋まつりのプログラムに組み込まれることとなった。

そこで本節では、本市の年中行事である「初市まつり」と「前橋まつり」のルーツについて述べていく。

(2) 関連する建造物

【街なかの伝統祭礼を構成する建造物】

①^{まえばしはちまんぐう}前橋八幡宮の社殿

八幡宮の社伝によると、貞観年間（859～877）に創建し、^{ありわらのなりひら}在原業平の子孫と言われる^{ながのなりしげ}長野業重が京都の^{いわしみず}石清水八幡宮から勧請したとされる。一方、社殿が国府のある西へ向けられていることから、東国源氏発祥以前の^{とうごくげんじ}上野国府八幡宮とする説もある。祭神には、^{おうじん}応神天皇、^{ひめのおおかみ}比売大神、^{じんぐうこうごう}神功皇后が祀られ、本殿には市神を祀る^{いちがみ}八坂神社が合祀されている。



八幡宮の拝殿

左：昭和 42 年（1967）八幡宮提供
右：現在

¹ 料亭、芸者屋、遊女屋が集積した歓楽街のこと。

戦国時代には、歴代城主が八幡宮に厚い崇敬^{すうけい}を寄せたことから、庶民もこれに倣い、やがて前橋^{まへはし}の総鎮守^{そうちんしゅ}となった。なお、元亀2年(1571)、時の城主であった北条高定^{きたじょうたかさだ}・高広^{たかひろ}親子は、八幡宮に土地の寄進状^{しよやう}・諸役免許状^{しよやく}を送るが、その文面に「当地^{うまやばし} 厩橋^{うまやばし}八幡宮」と書かれており、これが前橋の地名の語源となる「厩橋」が明記された最古の資料となっている。

社殿は昭和20年(1945)の前橋空襲によって焼失、現在の拝殿は昭和30年(1955)、本殿は昭和50年(1975)にそれぞれ再建された。棟札等はないが、昭和42年(1967)の写真に現在の拝殿の姿が写っている。境内には、明治黎明期に生糸商らが奉納した石灯籠^{いしどうろう}や、昭和40年(1965)に地元の時計商が奉納した鳥居、令和2年(2020)に前橋市景観資産に登録された樹齢800年とみられる幹周6m超のイチョウなどがある。

②熊野神社の鳥居

熊野神社の社伝によると、創建は不詳であるが出雲国八束熊野(島根県松江市八雲村熊野)より分社、勧請されたという。古来この地は、鬱蒼^{うつそう}とした木立に囲まれた神域で「熊野の森」と呼ばれていたが、江戸時代以降、町の発展とともに現在のような神社形態になったと考えられている。

昭和20年(1945)の前橋空襲で社殿は焼失したが、氏子の熱意により昭和36年(1961)に再建され、その際に奉納された現在の鳥居には「昭和三十六年四月吉日」と刻印されている。なお、戦後再建された社殿は平成4年(1992)に台風により被害を受けたため、大規模改修を行っている。

祭神は櫛御氣野命^{くしのみけのみこと}で、古くから神社の使者として八咫鳥^{やたがらす}が祀られており、三つの鳥の足跡が刻まれた古い礎石は「三ツ足八咫鳥石^{みつあしやたがらすいし}」と呼ばれる。日本サッカー協会のシンボルマークが八咫鳥をモチーフとしていることから、近年ではプロサッカーチームが必勝祈願を行ったり、サポーターが参拝に訪れることが多くなっている。

主な年中行事には、横山町^{よこやまちょう}(現在の千代田町四丁目)の八坂神社から継承された大酉祭^{おおとりさい}(酉の市)がある。当日は、熊手や縁起物の露店が建ち並ぶほか、この日に限り、願いを書き込んだ手ぬぐいで八咫鳥石^{やたがらすいし}を拭う「御神拭^{おみぬぐい}」と呼ばれる願掛けを行うことができる。



熊野神社の鳥居

③神明宮

神明宮の社伝によると、この地は古くから神明山^{しんめいざん}と呼ばれ、伊勢神宮^{いせじんぐう}(三重県)を祀る社であったが、文明10年(1478)、江戸城を手掛けた太田道灌^{おおたどうかん}により、前橋城の鬼門除けとして社殿が建立されたという。

祭神は大日靈命^{おおひるめのみこと}(天照大御神^{あまてらすおみ})で、境内には神明宮のほか、稲荷神社^{いなり}や菅原神社^{すがわら}、厳島神社^{いつくしま}などがある。

境内は、伊勢神宮を模した内宮^{ないくう}と外宮^{げくう}の構造となっており、神明社(内宮)と稲荷社(外宮)のそれぞれに参道がある。また、明治期までは伊勢神宮と同様に数十年に一度の遷宮^{せんぐう}



神明宮拝殿



遷宮の銘札

(建て替え)が行われており、神明宮は文政5年(1822)、稲荷神社は明治23年(1890)に遷宮したことが、それぞれの本殿に保管された木札に記されている。

【伝統祭礼の舞台となる街並みを構成する建造物】

④大蓮寺の地藏尊

大蓮寺の寺伝によると、永正2年(1505)に前橋城の鬼門に当たる柳原(大手町三丁目)にて創建、利根川畔の「虎ヶ淵」に近い場所であったことから山号を虎淵山としたとされる。江戸時代に入ると、初代藩主・酒井重忠は利根川の氾濫が堂宇を危険にさらしたため現在地へ移転することとし、決壊防止を祈念して元和2年(1616)に水の神である弁財天を祀った。

現在、境内にみられる地藏尊は、「旅稼ぎ」で知られる信濃国高遠(長野県伊那市高遠町)の石工集団「高遠石工」によるものとみられ、台座には文政9年(1826)、宮下政吉の文字が刻まれている。住職によれば、かつては参道の入り口に石灯籠と対で設置され、長らく門前のシンボルとして親しまれたが、昭和20年(1945)の前橋空襲により境内の建物がすべて焼失、焼け残った地藏尊は昭和48年(1973)に現在地に移されたという。なお、本堂は昭和51年(1976)に再建されたものである。



大蓮寺の地藏尊

⑤弁天通りアーケード

高度成長期、全国の商店街でアーケード設置がブームとなり、本市の中心商店街でも昭和36年(1961)の立川町通りを皮切りに、中央通り、弁天通り、オリオン通りにアーケードが設置されていった。弁天通りのアーケードは、柱のプレートによると昭和43年(1968)に設置され、大蓮寺を避けた線形としたことから曲がりくねった特徴的な形状となっている。後年、他のアーケードは設備の老朽化に伴い建て替えが進んだが、弁天通りのアーケードは当時の姿を残している。



弁天通りアーケード

弁天通りはもともと、立川町通りから大蓮寺までの参道で、参道の先に弁財天が祀られていたことから、周辺の街並みが弁天通りと称されるようになったものである。時代が進み、この辺り一帯が商業地として活性化すると、弁天通りも参道から商店街へと姿を変えていった。

弁天通り商店街は、広瀬川を渡って中心商店街へ至る北側の玄関口にあたり、かつて製糸工場や撚糸工場が林立した住吉町や若宮町とつながる動線上にもあることから、製糸業最盛期にはかなりの通行量を誇ったという。現在、中心商店街の空洞化によって通りの店舗も人通りも激減したが、昭和レトロを感じさせる街並みと、奥にどこまでも続いてみえる特徴的な形状から、映画やドラマ、CMのロケが頻繁に行われており、令和2年(2020)には前橋市景観資産に登録されている。また、弁天通りの中ほどから東へ抜ける小路地は、戦後復興の一環で整備された「呑龍仲店」と呼ばれる長屋横丁へ続いており、こちらも弁天通りと同様に昭和レトロの雰囲気が色濃く漂っている。

⑥臨江閣^{りんこうかく}

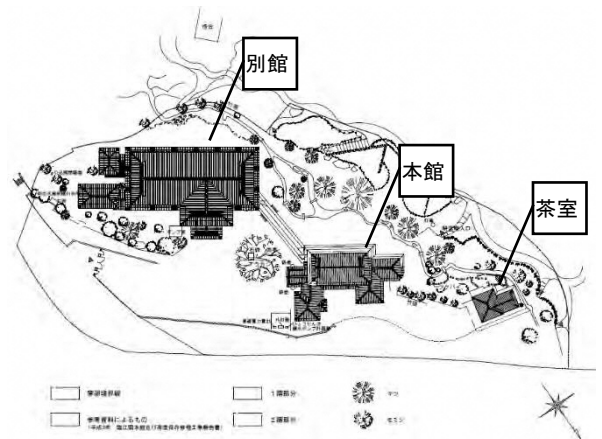
臨江閣は本市を代表する明治期の木造建築群で、命名は初代群馬県令・楫取素彦^{かとりもとひこ}による。本館・茶室・別館からなり、平成 30 年（2018）に国の重要文化財に指定された。建物の全体配置としては、これら 3 棟の建造物と庭園によりなる。本館は敷地のほぼ中央北寄り、茶室は更に北側に位置し、東側南寄りの敷地に置かれた別館と共に、それぞれ西側への眺望を妨げないように工夫しながら配置されている。

本館は、前橋への県庁移転に際して迎賓館の無いことを憂えた楫取素彦の勧めで、地元有志や企業の^{きよきん}醵金により明治 17 年（1884）に建設された。近世から近代へという急激な社会変化、欧米化の流れの中で、前代の技術を踏襲した日本古来の技術と伝統様式を用いた和風建築である。明治 26 年（1893）の明治天皇の^{ぎょうこう}行幸にて^{あんざいしよ}行在所として使われたのをはじめ、明治 35 年（1902）と明治 41 年（1908）には大正天皇（当時は皇太子）が滞在された。戦災に伴い、昭和 20 年（1945）から 9 年間は本市の仮庁舎として使用された。

茶室は、本館の建設に係る費用の大半が醵金によって賄われたという前橋市民の心意気に感動した楫取素彦や県庁職員による募金により、本館と同年に建設された。建築は、後に北大路魯山人も関わる^{ほしがおか}星岡茶寮^{さりよう}を手掛けた大工である^{きとおおじ}今井源兵衛^{るさんじん}の手による。茶席は、京間 4 畳半・本勝手・下座に床の間を持つ形式で、「わび」に徹して^{そうあんちやしつ}草庵茶室^{かなもりそうわ}を守った金森宗和の流れを汲むと言われる。

別館は、明治 43 年（1910）の一府十四県連合共進会に先立ち、^{きひんかん}貴賓館として建設された。2 階には 180 畳の大広間があり、建築用材には^{なかせんどうあんなかじゆく}中山道安中宿の杉並木の巨木 30 本が使用され、大広間の周囲に^{まさめ}柱目が美しく並び、今も大屋根を支えている。共進会閉会後は本市に引き渡され、群馬を代表する唯一の大公会堂として利用された。

これら 3 棟の相乗効果により歴史的建造物群としての価値を生み出している臨江閣は、幕末から明治初期に活況を呈した製糸業を背景とした市民力の象徴であり、当時の前橋の隆盛を伝える建物である。



配置図（『臨江閣』保存管理計画書より）



本館



別館



茶室



臨江閣と日本庭園

⑦前橋城跡

度重なる利根川の氾濫により、江戸時代中期に前橋城は廃城となったが、慶応3年(1867)に再築され、明治に入ってからには本丸御殿が群馬県庁舎として使用されるようになった。以降、かつての城内が官庁街・住宅街へと変貌していく中で城の遺構は徐々に失われていったが、現在も群馬県庁と前橋公園の土塁や風呂川の一部に面影が残る。

県庁脇の土塁の上にある「前橋城址之碑」は、城を再築した当時の藩主・松平直克の功績を称えて明治41年(1908)に建立されたもので、篆額(石碑に刻まれる表題)は直克の長男である松平直之(伯爵)、撰文は重野安鐸、書は日下部東作による。



前橋城址之碑

⑧前橋城 車橋門跡

前橋城の数少ない遺構の一つで、城の外曲輪から金井曲輪を結ぶ大手筋にあった重要な門の跡である。酒井氏4代忠清(寛永14年(1637)～天和元年(1681))の時代に、2本の柱の上に横木を1本置いた冠木門から、櫓の2階を通して門の左右に渡れる渡櫓門に改築され、酒井氏の後を継いだ松平氏が川越へ移封した後もこの門は存続した。

現在見られる門の跡は、昭和39年(1964)に市の史跡に指定されているが、同年の区画整理事業により間隔が狭められ、西側の台石が8m移動した状態となっている。なお、近隣の民間建物の地下には、車橋門の地下石積が保存されている。



前橋城車橋門跡

⑨前橋城 大手門跡

城の玄関口となる大手門から伸びる橋のたもとにあった石垣で、酒井氏時代の遺構と推定される。車橋門の台石よりも大きく、表面を加工して隙間なく積んだ切込積みになっている。令和3年(2021)の民間再開発事業に際し、地表から1.5m下で発見された。

いったんは埋め戻されたが、市民から見える形での保存を要望する声が多く寄せられたことを受け、事業者の厚意により、後年の公開を前提とした施工が行われることになった。



前橋城大手門跡

⑩ 妙安寺

妙安寺の寺伝によると、親鸞聖人の高弟・成然によって下総国猿島（現在の茨城県西部）に創建され、酒井重忠の招請により川越に移った後、慶長6年（1601）の重忠の厩橋城入城に伴い厩橋に移転したとされる。妙安寺には、親鸞聖人が自作した木像があったが、徳川家康からの求めに応じて京都の東本願寺の創建にあたり移された。これが縁となり、妙安寺は家康から葵紋免許を得て数多くの宝物が贈られるとともに、親鸞聖人像の「御里御坊」と呼ばれるようになり、東本願寺からも特別の格式を与えられた。



妙安寺の梵鐘

同寺由来の文化財は多数にのぼるが、ほとんどは群馬県立歴史博物館に保管されており、現地で見ることはできるのは、15世紀ごろに鑄造されたとみられる「梵鐘」（県指定の重要文化財・昭和30年（1955））だけとなっている。

なお、本堂は昭和20年（1945）の前橋空襲で焼失し、昭和22年（1947）に再建されたことが、現在の本堂内部の柱の墨書きによって記されている。

⑪ 源英寺

源英寺の寺伝によると、元和2年（1616）頃に前橋城の鬼門除けとして酒井重忠が創建した寺で、山号の「柳原山」は、寺の所在地がかつて柳原という地名であったことに由来するとされる。

寺宝である「酒井重忠画像」は、同寺に残る酒井重忠画像口伝書・由来書によれば、創建と同年に重忠が自筆したものとされる。昭和20年（1945）の前橋空襲では、防空壕に入れて罹災を免れ、昭和48年（1973）に市の重要文化財に指定された。



酒井重忠画像

現在の本堂は令和元年（2019）に大規模改修を行っているが、それ以前には昭和28年（1953）に本堂山門屋根葺替工事、昭和46年（1971）に本堂修築工事が行われたことを示す芳名板が本堂内部に残されている。なお、建物の主要構造部は山号額に刻まれた寛政10年（1798）のものと推定されている。

⑫ 龍海院

龍海院の寺伝によると、酒井重忠の移封に伴い、菩提寺である同寺も慶長6年（1601）に川越から厩橋へ移設された。当初は市内の岩神村にあったが、火災によって現在地に移ったという。寛延2年（1749）、酒井氏は9代忠恭の時代に姫路へ移封となるが、同寺は本市に留まり、その後も菩提寺であり続けた。

文政4年（1821）に火災に遭い、文政年間（1818～1830）に大規模な伽藍再興等の整備が行われ、現存する本堂は文政12年（1829）、御霊屋は同10年（1827）に建立されたことが棟札からわかっている。山門（中門）は棟札によれば天保12年



龍海院の本堂

(1841)に上棟したこととなっているが、様式手法からみてその時代よりも前に作られたものと考えられている。

境内には、初代から15代まで歴代藩主の墓石が建ち並ぶ広大な墓所（前橋藩主酒井氏歴代墓地）があり、昭和39年（1964）に本市第1号となる市の史跡に指定された。なお、墓域内には酒井氏の分家で、伊勢崎藩主の初代と6代の墓もあるほか、一般墓地内には初代市長下村善太郎の墓がある。



酒井氏歴代墓地

⑬ 長昌寺

長昌寺の寺伝によると、延徳元年（1489）、厩橋城中の老松の下に草堂^{そうどう}を設け、城主の長野方業^{ながのまさなり}の持仏である阿弥陀三尊^{あみださんぞん}を安置して本尊としたのが始まりと伝わる。天正10年（1582）、織田信長の四天王と称された滝川一益^{たきがわかずす}が厩橋城主になった際、近隣の諸将を招いて長昌寺の境内にて本格的な能興行を行った。これが記録に残る群馬県で最初の演能とされる。

現在の本堂は昭和42年（1967）に再建されたもので、棟札等はないが建立当時の写真が残されている。



長昌寺の本堂

⑭ 上毛倉庫

社史によれば、上毛倉庫株式会社は旧第三十九国立銀行の役員らの出資により明治28年（1895）に設立された。定款に「繭糸及其ノ他貨物ヲ頼リ、之ヲ保管シ及ビ貸庫ノ業を目的トス」とあるように、繭糸を保管するために造られた倉庫業の会社である。前橋駅前（表町二丁目）に3棟のレンガ倉庫を建設し、そのうち2棟が現存している（出典：前橋市景観重要建造物悉皆調査・平成26年（2014））。構造は、堅牢なイギリス積みの三重レンガ壁で、出入口と窓は鉄扉、窓の内側には盗難防止の鉄格子がはめられている。当時、事務所内には前橋商業会議所（現在の前橋商工会議所）の前身である前橋商議会在置かれた。



上毛倉庫

大正6年（1917）には現在の若宮町一丁目にも倉庫を建設したが、後年取り壊され、現存するのは表町二丁目の2棟のみで、現在は紙類の保管庫として営業を継続している。

⑮ 旧勝山社煉瓦蔵^{きゅうかつやましやれんがぐら}

旧勝山社煉瓦蔵は、明治 35 年（1902）に勝山社の倉庫として建造された。大正 3 年（1914）に群馬商業銀行に所有権が移転すると、その後、銀行の担保物件としていくつかの変遷を辿り、昭和 27 年（1952）に民間事業者に買い取られた。昭和 48 年（1973）まで同事業者の倉庫として利用され、それ以降は飲食店として活用され現在に至る。構造は焼き過ぎ煉瓦²のイギリス積みで、道路拡幅に伴い昭和 28 年（1953）に現在地に曳移転^{ひきいてん}され、昭和 56 年（1981）には東側に出入口が新設されている。平成 20 年（2008）には国の登録有形文化財に登録された。



旧勝山社煉瓦蔵

⑯ 旧安田銀行担保倉庫^{きゅうやすだぎんこうたんぽそうこ}

旧安田銀行担保倉庫は、貸付金の担保物件（主に繭、生糸）用倉庫として大正 2 年（1913）に建設されたもので、市内に現存する最大のレンガ倉庫である。昭和 26 年（1951）に協同組合前橋商品市場に払い下げられ、隣接地で稼働していた乾繭取引所の現物倉庫として利用された。レンガ壁はイギリス積みを採用し、レンガを接着する目地は東京駅にも用いられた「覆輪目地^{ふくりんめじ}」と呼ばれる特別な仕上げとなっている。平成 16 年（2004）には国の登録有形文化財、平成 24 年（2012）にはぐんま絹遺産、令和 2 年（2020）には前橋市景観資産に登録され、現在は建物の一部を貸館等に利用している。



旧安田銀行担保倉庫

⑰ 群馬県本庁舎（昭和庁舎）^{ぐんまけんほんちやうしゃしやうわちやうしゃ}

初代県庁舎であった前橋城本丸御殿の老朽化に伴い建設された 2 代目県庁舎で、昭和 3 年（1928）の竣工以来、70 年以上にわたり県都の顔として親しまれ、現在も貸館等で利用される現役施設である。1 階は石張り、2・3 階はレンガを想起させるスクラッチタイル張りで、蚕糸業県群馬の最盛期を象徴する洋風建築である。後述の群馬会館とともに、昭和 20 年（1945）の前橋空襲から難を逃れた稀有な建物で、平成 8 年（1996）に国の登録有形文化財に登録されている。



昭和庁舎

平成 27 年（2015）に放映された NHK 大河ドラマ「花燃ゆ^{はなもゆ}」では、主人公・文の夫が後の群馬県令・榎取素彦であり、物語後半が群馬を舞台として描かれたため、昭和庁舎に大河ドラマ館が設置され、約 15 万人の見学客が訪れた。



本丸御殿（初代県庁舎）

² 普通の煉瓦よりも良質の粘土を、高温で焼き過ぎになるくらいに焼いた煉瓦。吸水性が少なく、摩滅に強い。

⑱群馬会館

昭和天皇の即位を記念して昭和5年(1930)に県庁前に建設された。当初は産業会館の位置付けで、1階には商品陳列所の事務室、参考品室、商品陳列室と畜産組合、信用組合が、2階には県農会、購買組合が入っていた。こうしたことから群馬会館は「産業の殿堂」と言われた。昭和58年(1983)のあかぎ国体の時に内部が改装されて公会堂となったが、外観は建設当初の姿を残したまま現在に至る。建物は重厚でクラシカルなルネサンス様式で、外壁は昭和庁舎と同様にレンガを想起させる。群馬県の近代化を象徴する建物のひとつで、こちらも平成8年(1996)に国の登録有形文化財に登録された。



群馬会館

⑲「建設と平和」像

JR 前橋駅北口ロータリーの中央に佇む2体の銅像は、戦災復興記念塔として昭和28年(1953)に彫刻家・^{わけべしゅんじ}分部順治が制作したもので、当時、駅からけやき並木にかけて数多く設置された公共彫刻(パブリックアート)の一つである。当初は駅北口の噴水の中央にあり、男性像と女性像が衝立を挟んで背中合わせの形で設置されていたが、駅舎の高架化にあわせて平成元年(1989)にロータリーが改修された際、男性像の台座に「建設」、女性像の台座に「平和」の銘が刻まれて左右に並んで設置されるようになった。現在地には平成24年(2012)に移設されている。



現在の銅像

駅舎が高架化される以前の先代前橋駅は、昭和2年(1927)に建設された洋風木造の駅舎で、翌年に竣工した昭和庁舎、3年後に建設された群馬会館とともに、前橋を代表する洋風建築であった。長らく県都の顔・玄関口として親しまれたが、昭和61年(1986)の駅の高架化に伴い、約60年の歴史に幕を下ろした。その後、駅舎やロータリーは度々改修工事が行われているが、工事が行われるたびに、かつての駅舎を知る世代を中心に復元を求める声が多く寄せられ、現在もそうした要望が根強く聞かれるという。



先代駅舎の時代の銅像

⑳橋林寺

橋林寺の寺伝によると、文明7年(1475)に^{ふんめい}厩橋城主・^{うまやばし}長尾景信によって厩橋城内金井曲輪に建立された。^{けいあん}慶安3年(1650)に藩主・酒井家から寺領20石を与えられ、現在地(住吉町一丁目)に移った。^{てんめい}天明5年(1785)、^{かえい}嘉永5年(1852)、^{ぶんきゅう}文久2年(1862)と度重なる火災に見舞われながらも再興を果たしてきた。明治期には前橋積善会(慈善事業団体)の本部となり、子守をする子供たちの教育所も開設された。昭和20年(1945)の前橋空襲により寺内におけるほとんどの建物が消失した。



橋林寺の開山堂

現存する開山堂は、空襲による焼失を唯一免れた鉄筋コンクリート型枠ブロック造の建物で、「群馬県近代和風建築総合調査報告書」によれば、昭和7年(1932)に建築家・^{なかむらまもる}中村鎮の設計により作られたものであることがわかっている。

②①^{ことひらぐう}琴平宮

創建は不詳であるが、酒井重忠が慶長6年（1601）に厩橋城に入城した際に奉幣し、以来、藩主が代々崇敬してきた神社である。^{ぶんか}文化～弘化年間（1804～1848）にかけて、旅の道中無事を司る神として親しまれ、10月の大祭には参拝の人々が列をなし、広瀬川に架かる厩橋から当社に至る道筋には多くの露店が連なり、大変なにぎやかさであったと伝わる。旧社殿は昭和20年（1945）の前橋空襲で焼失したが、境内の建立碑によれば、現在の社殿は昭和33年（1958）に再建されたところである。



琴平宮

②②^{すゐわかみこじんじや いしどうろう}諏訪若御子神社の石灯籠

諏訪若御子神社の社伝によると、文明12年（1480）に^{かきまみょうげんにゅう}笠間明玄入道が前橋城築城の際、奉斎したのが始まりとされ、当時、この地は旧利根川の流路にあったことから、その一^{いっしゅう}洲上に祀られたものと推測されている。当神社の所在地である城東町二丁目は、かつて「諏訪町」という町名であり、辺り一帯の鎮守として崇敬されていたことを示している。境内には^{かえい}嘉永元年（1848）の文字が刻まれた石灯籠が置かれている。社殿は昭和20年（1945）の前橋空襲で焼失し、現在の社殿は昭和31年（1956）に再建されたものである。



諏訪若御子神社の石灯籠

②③^{あたごじんじや いしどうろう}愛宕神社の石灯籠

愛宕神社の社伝によると、寛永7年（1630）に分社を奉斎し鎮座したものとされる。^{ほむすびのみこと}火産霊命を祭神とし、火伏の神として厚い信仰を集めた。また、前橋城の鬼門除けとして、社殿は城から北東の方角に建てられている。元禄15年（1702）と昭和52年（1977）に再建されているが、境内の石灯籠には、^{ぶんせい}文政3年（1820）の文字が刻まれている。



愛宕神社の石灯籠

②④^{えいじゅじ きしぼじんじや}永寿寺の鬼子母神堂

永寿寺の寺伝によると、寛文10年（1670）に姫路藩主・^{まつだいらやまと}松平大和守が姫路で開基した寺で、松平氏が移封になるたびに同寺も移転した。慶応3年（1867）に前橋城が再建され、松平氏の前橋帰還が決定すると、4年後の明治4年（1871）に川越から現在地（本町三丁目）に移った。廃藩置県後、松平氏が当寺の本堂を家臣の禄配給所として使用したことから、藩士から厚く信仰されたと伝わる。

境内の鬼子母神堂は、昭和15年（1940）に建てられたことが奉納額に記されている。また、松平家より拝領した前橋城の登城太鼓も現存している。



永寿寺の鬼子母神堂

②⑤ 厳島神社の狛犬

厳島神社の祭神は市杵島姫命^{いちきしまひめのみこと}で、水の災いを除き幸福を招く徳のある神として、広く全国に祀られる。境内には水波能売命^{みずはのめのみこと}を祀る水天宮があるが、もともと横手町の諏訪神社に祀られていたところ、明治18年（1885）の利根橋架橋に際し、水害が出ないようにと移されたものである。境内には、昭和41年（1966）造立の狛犬が鎮座している。



厳島神社

②⑥ 前橋ハリストス正教会の二代目聖堂（旧聖堂）

前橋ハリストス正教会は、前橋に最初に入ってきたキリスト教の教派で、明治11年（1878）に士族によって設立された。翌年には、ロシア人のニコライ大主教が、藩営前橋製糸所の創立に尽力した深澤雄象らに洗礼をした記録が残っている。実際に、深澤は同教会の中心として活躍し、後に創業する研業社や精糸原社における工女の指導には、キリスト教精神が大きく影響しているとの評価がなされている。

初代の聖堂は昭和20年（1945）の前橋空襲で焼失し、二代目の聖堂（旧聖堂）が昭和47年（1972）に再建された。平成27年（2015）には新たな聖堂が建設され、内部のイコノスタス（イコンを配した壁）は新聖堂に移設されたが、旧聖堂建物はそのまま保存されている。



ハリストス正教会の旧聖堂

②⑦ 前橋聖マッテア教会

前橋聖マッテア教会は、イギリス国教会の流れをくむ聖公会の教会で、教会名の「マッテア」はキリストの十二使徒の一人マッテア（マティア）より採られたものである。

明治22年（1889）、アメリカの聖公会宣教師であるH・ジェフリー師が、北曲輪町^{きたくるわちよう}（現・大手町）の岩上氏の住宅の一室を借り受けて開いた伝道集会が始まりとされ、2年後には教会組織が整えられた。

明治33年（1900）に現在地に礼拝堂が完成し、前橋聖マッテア教会と名付けられた。礼拝堂は昭和20年（1945）の前橋空襲で焼失し、現在の聖堂は昭和27年（1952）に再建されたことが壁面に記されている。



前橋聖マッテア教会

前橋カトリック教会は、群馬県におけるカトリック教の最初の教会であるとともに、中心的な教会である。現在の聖堂はゴシック様式を基調とし、前橋教会最初の日本人司祭・内野作蔵^{うち の きくざう}の尽力によって昭和7年(1932)に建設された。正面左右に塔を立ち上げた双頭形式の構造で、尖頭アーチ、ステンドグラスを使った大きな窓を持つ。

前橋カトリック教会聖堂



(3) 歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

①初市まつり

ア 初市まつりの歴史

毎年1月9日に開催される初市まつりは、国道50号の本町一丁目交差点から本町二丁目五差路まで（本町通り）の約350mを通行止めにして行われる新年の風物詩で、例年、6～8万人の人出があり、沿道に並ぶ約300店の露店の多くがダルマや縁起物を商うことから、「だるま市」とも呼ばれる。毎月4と9の日に本町通りで開かれた六斎市が起源とされ、諸説あるものの初代前橋藩主酒井重忠の時代に始まったと伝わる。

江戸時代初期、城下町では前橋城大手門にもっとも近く、前橋八幡宮の門前であった連雀町が栄えていた。連雀町には当時、「町人の祖（町人頭）」と称される木嶋助右衛門が居を構えており、助右衛門9代目の時³、藩主への願い出により本町の3か所に市を立てることを許され、翌年正月9日、初めて市を開き見世張りしたのがはじまりとされる。また、地元の言い伝えによると、「当日は、八坂神社の御神輿を奉じて市神を祀り、庶民の信仰を収め、藩侯（藩主）よりは米6俵・太刀一口・神馬一頭の寄進があり、方七里に及び商工農民が集まりにぎわった。」とあり、かなり遠方からも人々が足を運んだ様子が伺える。

市は当初、食料品や生活物資などの取引が主であったが、元禄期（1688～1704）を過ぎると、後に本市の基幹産業となる生糸関連物品の取引が増えていき、農村部からは多くの養蚕家が繭を卸しにくるようになった。その後、市は生糸の取引を中心に栄え、次第に金物、日用雑貨、ダルマなどの縁起物が売られるようになったという。

当時、養蚕家の間では、蚕が繭を作るまでに4回脱皮することを「起きる」と言っていたことにかけて、「七転び八起き」のダルマは養蚕の守り神として祀られていた。また、「（ダルマの目が）猫の目に似ていてネズミを防ぐ効果がある」との評判から、製糸業最盛期の頃にはダルマが飛ぶように売れたと伝えられている。

前橋の初市が「だるま市」と呼ばれるようになった明確な経緯は定かではないが、だるま市の起こりは、文化年間（1804～1818）、藩主酒井氏の祈願所で当時前橋藩領であった少林山達磨寺（高崎市）の住職にダルマの木型を掘ってもらった豊岡村（高崎市）の村民が、これを紙の張子のダルマとして製作し人気を集めたものと言われている。豊岡村の農民2、3人がかごを背負い、前橋初市に登場したのが明治14年（1881）以前とされ、明治44年（1911）の新聞記事には「前橋名物達摩市」の記載がされていることから、本市の「生糸のまち」の歩みとの密接な関わりが推察される。



初市まつりの光景



昭和42年（1967）の初市まつり

³ 元禄3年（1617）とする説と、天和3年（1683）とする説がある。

なお、本市が発行する「広報まえばし」によれば、初市が休止となったのは戦災翌年の昭和 21 年（1946）だけで、翌昭和 22 年（1947）には再開となった。また、地元自治会が編纂した「本町のあゆみ」（平成 2 年（1990））によれば、戦災で焼失した神輿も昭和 34 年（1959）には新調されている。

イ 渡御の儀

江戸時代の市では市神を祀る神輿が奉納されたことから、現在の初市ではこれに倣い、市神が市中を巡る「渡御の儀」が行われる。渡御の儀では、市神を奉じた神輿が八幡宮を出発し、木遣りや祭主、神職などを連ねた行列が市街地を練り歩く。

行列のルートは、中心商店街を南北に貫く「千代田通り」から、明治時代に繭市場通りと称された「立川町通り」へと入り、かつて桑町通りと呼ばれたアーケード商店街である「中央通り」を抜け、国道 50 号の「本町通り」へと巡行し、終点である仮宮で「大ダルマ」と「大獅子」が行列を出迎える。

仮宮が設置される本町通りは、現在の初市のメイン会場であるが、かつては本市における生糸市場の本場で、幕末には前橋プラザ元気 21 付近に生糸の品質を藩が直接監督するための「生糸改所」が置かれ、明治に入ってから多くの銀行が集積する金融の中心地であった。当時、沿道には大きな店構えを備えた商人屋敷が軒を連ね、荷物を積んだ馬車が連なり、商人を乗せた人力車が東西南北に行き交ったと伝わる。また、本町通りは沼田街道から江戸街道への道筋として、本陣や問屋、旅館などが立ち並び、宿場の役目も果たしていた。現在、当時の面影はほとんどみられないが、令和 2 年（2020）にコンセプトホテルとして再始動を果たした「SHIROIYA HOTEL」は、江戸時代に創業した老舗「白井屋旅館」をリノベーションしたものである。

なお、平成 14 年（2002）には、本町通りの中央アーケード南から本町二丁目五差路東交差点までの区間が、旧都市景観条例に基づく景観形成モデル地区に指定されている。



渡御の儀



生糸改所



生糸改所の碑



本町通り沿いに設置される仮宮



SHIROIYA HOTEL

ウ すまんじゅうと福おこし

初市の開催にあわせ、群馬県民の郷土食である「焼きまんじゅう」の老舗・安政4年（1857）創業の原嶋屋総本家からは、甘だれ味噌を塗って焼く前の「すまんじゅう（数万拾）」が市神に奉納される。店の伝承によれば、文久2年（1862）の初市の日、生糸改所のお披露目で横浜の商人が招待されたため、茶菓子としてすまんじゅうを供したところ、「これは縁起が良い、ひと市毎に『数万両』儲かる」と大変喜ばれたという。これを聞いた店主は、さっそく八幡宮にすまんじゅうを献じ、商売繁盛を祈願した。以来、初市の朝にはすまんじゅうを献饌し、祭典後の直会では、「冷酒の肴はすまんじゅう」という独自の風習が連綿と続いていくことになった。



すまんじゅう



福おこし

また、初市のメイン会場近隣で商う明治3年（1870）創業の老舗和菓子店・御菓子司青柳本店では、土産菓子である「福おこし」を初市の当日限定で販売している。福おこしは創業当時から売り始めたものであるが、「身を起こし家を興す」との言い伝えが評判を呼び、毎年、初市まつりの朝には店舗前に長い行列がみられ、今でも当日のうちに完売する売れ行きをみせている。

現在では、初市まつり当日に、すまんじゅうと福おこしを仮宮と八幡宮へお供えするのが恒例となっている。

エ だるま市

現在の初市は、八幡宮に隣接する八幡宮公園にて、古ダルマを供養する「お焚き上げ」から始まる。お焚き上げは、役目を果たしたお守りやダルマなどを感謝の意を込めて供養する神事で、初市における起源は定かではないが、新聞記事から昭和6年（1931）にはすでに行われていたことが分かっている。



お焚き上げ



値切りのやりとり



メイン会場である国道50号には、市に見立てた露天商がずらりと軒を連ねるが、その内の4分の1程度がダルマや招き猫、熊手等の縁起物を商う。

軒先では、客が値切りを仕掛け、店主が「何百万両！何千万両！」と威勢よく返す姿があちこちで見られる。だるま市のこうした丁々発止のやりとりには、「生糸のまち」として躍進した本市最盛期の熱気が記憶されている。

なお、平成29年（2017）は、市開始400年と初代藩主・酒井重忠没後400年が重なる年であったことから、その年の初市まつりに「初市創祀400年記念」の冠を銘打ち、菩提寺・是字寺龍海院で

の「重忠公追善法要」や、龍海院から八幡宮への「御霊行列」、太刀一口の寄進にちなんだ「刀剣鍛錬実演」などの追加行事が行われた。



追善法要



御霊行列



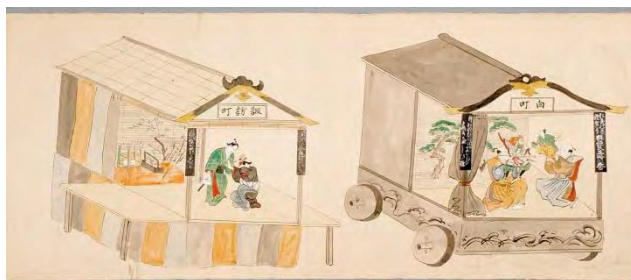
刀剣鍛錬実演

②前橋まつり

ア 街なかの祭礼の推移と前橋まつり

【連雀町八坂神社の祇園祭礼】

江戸時代から続く本市随一の大祭典といえ
ば、連雀町八坂神社の夏の祭礼である「祇園祭
礼」であった。当時の様子を知る手掛かりに
は、宝暦3年(1753)と寛政10年(1798)、文
政11年(1828)の3本の絵巻があり、松平氏
が川越に転封した後も絶えることなく続いて
いたことが分かる。絵巻には、周辺の各町が趣
向を凝らした祭礼屋台や祇園山車を曳き出す



絵巻に描かれた祇園祭礼の祭礼屋台
前橋祇園祭礼絵巻 宝暦3年(市指定の重要文化財)

様子が描かれており、この日に限っては町人たちが城中に入れる特別な日であったという。また、天
保12年(1841)の「赤城詣」によれば、祇園祭礼は各町にとって年に1回の楽しい行事で、競って
踊り屋台や山車を出して練り歩いたとあり、宝暦(1751~1764)の頃がもっとも盛んで、寛政2年
(1790)には本町で歌舞伎芝居が行われた様子も書かれている。

その後の推移は定かではないが、明治31年(1898)の「前橋案内」では、遊勝案内⁴の6月の項目
に以下のような記述がみられ、その他の文献にも「連雀町の天王祭り」や「祇園会」などが頻繁に登
場することから、祇園祭礼は明治時代も続いていたと推察される。

「(前略) 氏子の町々より花山車を挽き出し盛に祭りを行ふ。現在は、流行病などの関係より九月の秋冷の季に
延期することとなりぬ。(句読点追加、漢字は常用に変換)」

明治末期に入ると政府による神社合祀政策が始まり、連雀町八坂神社は約100m東に位置する
八幡宮に合祀されたため、連雀町八坂神社としての祭礼はここで途絶えたと推察される。しかし、
大正2年(1913)9月16日の上毛新聞には、「前橋大祭の三日」の見出しで以下の記事が掲載さ
れた。

「(前略) 十四日、北曲輪町より神明町を出て白傳横丁より新塲町通
りへかけて全町を花車にて埋め、(中略) 厩橋を渡り、向町通りを大渡
河原町まで繰込み、逆に引返して細ヶ澤新道を岩神、国領町へ詰め、(中
略) 小柳町を通り比利根橋際にて集合し、弁天通りにて解散したるは午前
三時の深更なり。十五日は、立川町に揃へ尻より諏訪町へ突込みて後向
となり、一番より順次、萱町を通り榎町へ抜け、横山町通りより桑町、
連雀町、(中略) 芳町より榎町、紺屋町へ出て目出度解散。市中の賑は
ひは云わずもがな、前橋に三十余本の花車が練る大祭りがあると聞き、上
野線に両毛線に見物の客は充滿して、(中略) 着毎に吐き出さるゝ人員は
数万人に及びたるべし。」



前橋大祭の様子
提供：上毛新聞社

⁴ 年中行事や名所について紹介するもの。現在で言うレジャー案内。

この記事から分かるのは、連雀町八坂神社が合祀されたわずか数年後には、中心商店街全域を巡行する山車の祭典が数万人もの見物客を集めて行われていたという事実であり、「連雀町八坂神社の祇園祭礼」が「八幡宮の前橋大祭」として継承されたことを示している。その後も大正5年（1916）には、八幡宮の県社昇格に伴い市内42か町に及ぶ山車巡行の大祭典が計画されるも、伝染病の蔓延で中止を余儀なくされたことが新聞記事になり、そこからほぼ毎年、9月中旬には前橋大祭の記事が登場する。その間、祭典の規模は年次によって異なっていたようであるが、昭和に入ってから記事の掲載は続き、戦前まで山車の祭典が続いていたことが分かる。



前橋大祭で使用された山車で
唯一現存する「向町の山車」

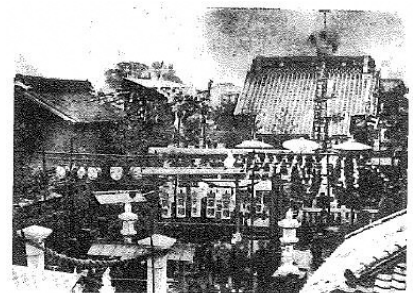
しかし、昭和20年（1945）の前橋空襲によって、祭典を司る八幡宮の社殿が全焼、各町の山車もほとんど焼失し、前橋大祭はここで途絶えた。なお、雷電神社（平和町一丁目）に残る「向町（^{むかいちょう}現在の平和町）の山車」（市指定の重要有形民俗文化財・平成25年（2013））だけが、唯一空襲を免れ、現在も保管されている。

【^{よこやまちょう}横山町 八坂神社の神輿渡御】

神社の秋の祭礼では、神輿を奉じて町を練り歩くケースが多く見受けられるが、明治時代の八幡宮や神明社、熊野神社、横山町八坂神社などでも神輿の渡御が行われており、中でもにぎやかで有名であったのが横山町八坂神社の「^{てんのうみこし}天王神輿」であった。

横山町八坂神社の神輿は、幕末の前橋城再築に際し、築城に協力した神社への礼として藩主松平氏から神輿の要材が寄進されて造成されたものである。当時、横山町八坂神社の秋の祭礼では、本宮である^{あまがわむら}天川村（現在の文京町四丁目）の八坂神社まで神輿渡御を行っており、これを天王神輿と呼んだ。渡御の途中、広瀬川に乗り入れて川中で神輿を揉み揺らす勇ましさが評判を呼び、見物人が山をなしたと伝わる。結局、あまりの暴れぶりに本宮までの渡御は明治23年（1890）頃には打ち切られ、渡御の範囲は中心商店街一円に留まることとなった。なお、神輿渡御そのものは、少なくとも昭和17年（1942）までは続けられていたことが分かっている。

その後、明治31年（1898）に境内地を拡大すると、その記念として、花柳界では縁起をかつぐまつりとされる「お酉さまを」との声が起こり、当時、西の市で有名であった^{きのわしみや}佐野鷺宮神社（栃木県佐野市）から勧請を行い、花まちにふさわしいまつりとして、横山町八坂神社でも毎年12月に「西の市」を行うようになった。以降、秋の神輿渡御と年の瀬の西の市は、新年の初市をしのぐ盛況ぶりであったことが伝えられている。（出典：昭和56年（1981）「我がふるさと」）



上：境内地拡張後の横山町八坂神社
下：天王神輿の様子（昭和17年頃）
出典「我がふるさと 小石神社と横山町」町田修一郎（昭和56年）



小石神社の分社

明治末期には、横山町八坂神社も政府の神社合祀政策によって複数の神社と合併し、明治 40 年（1907）に「小石神社」に名称変更となるが、「生糸のまち」の旦那衆を支える「花まち三ヶ町」の鎮守として繁栄は続いた。しかし、昭和 20 年（1945）の前橋空襲によって社殿も神輿も焼失し、小石神社の神輿渡御はここでいったん途絶えた。その後、社殿は昭和 30 年（1955）に再建されたが、社会情勢の変化に伴って昭和 46 年（1971）に郊外（敷島町）への移転が決定、跡地には大型百貨店が建設され、その屋上には小石神社の分社が建立（昭和 48 年（1973））されている。また、神輿も戦後再建されており、渡御が再開された時期は不明であるが、現在では前橋まつり当日に、神輿愛好家らによって現在地から担ぎ出され、まつり会場を巡行している。

なお、小石神社の移転に際して、地元商店街から西の市の継続が強く望まれたため、立川町通りに面した熊野神社が引き継ぐこととなり、地元商店街・熊野神社・小石神社の共催で「大西祭」として現在も続けられている。

【前橋まつりの歴史】

昭和 20 年（1945）8 月 5 日、本市は大規模な空襲を受け、市街地の 8 割が焦土と化した。しかし、かつて都市消滅の危機を何度も克服してきた本市では、ここでも復興への強い心意気が見られ、市民が総力を挙げて尽力し、全国で最も早いとされる昭和 28 年（1953）には復興に目途をつけている。

戦後復興は区画整理や街路事業などの都市整備が中心であったが、中でも「けやき並木通り」と呼ばれる幹線道路は、後年、本市の代表的なシンボルロードとなり、戦後復興を象徴する整備事業となった。このほか、戦後復興の取り組みには、戦没者・被災者の慰霊や市民の活力高揚を意図する催しも含まれていた。本市が発行していた「前橋市事務報告書」によれば、昭和 23 年（1948）に開催された「復興祭」はそうした催しの一つで、戦後復興に際して市民の総力を結集するムードを醸成することが目的であった。翌年には名称を「商工祭」に変え、しばらくの間は物産の展示即売会や花火大会、芸能大会などが行われていたが、多くの市民から「前橋ならではの」を感じさせる行事の開催や、観るだけではなく参加できるイベントを求める声が寄せられていた。

そこで、昭和 34 年（1959）に商工祭から「前橋まつり」に名称を変更し、かつて前橋を代表する夏秋の風物詩で、空襲によって途絶えてしまった「祇園祭礼（前橋大祭）」と「神輿渡御」を再現する意味を込めて、会場範囲を中心商店街全体に広げ、山車と神輿の巡行を中心とする行事に再編し、市民参加型の新たな伝統行事としての定着を目指すこととなった。

前橋まつりの名称になって間もなく、古くからりょうもう両毛地域（群馬～栃木）の俗謡として知られるやぎぎん八木節音頭が行事の一つに加わり、



けやき並木通り



八木節



鼓笛パレード（昭和 42 年（1967））

昭和 40 年（1965）からは、市内の小学生によるマーチングバンドが本町通りを行進する「鼓笛パレード」が追加され（当時の新聞記事より）、平成 7 年（1995）には、北海道の「ソーラン節」をヒントに、歌手・三橋美智也が歌った「前橋音頭」（昭和 31 年（1956））をアレンジした「だんべえ踊り」が行われるようになった。



だんべえ踊り

現在では、「生糸のまち」の時代に繭市場通りと称された立川町通りを主会場に、桑町通り・本町通り・横山町通り・千代田通りを範囲として二日間にわたって開催される。まつり本部は、勇壮な天王神輿で名を馳せた小石神社から西の市を引き継いだ熊野神社の参道敷に設置される。主要な通りには露天商が所狭しと軒を連ね、各行事の参加者と見物客でごった返す。行事の中には子供が主役のものもあるため、わが子・わが孫の雄姿を見ようと両親や祖父母が沿道にかけつけ、まさに市民総参加の催しとなっている。

なお、本市では、江戸時代に現在の市域内で藩主を務めた酒井氏、松平氏、秋元氏、牧野氏の四大名家を「前橋四公」と称し、平成 28 年（2016）から「前橋四公祭」を開催しているが、平成 30 年（2018）の第 3 回では、70 回目を迎えた前橋まつりと同日開催とし、前橋まつり二日目に各家ゆかりの人物に扮した行列が会場を練り歩く「四公武者行列」を行った。



写真は松平家の武者行列

【山車の祭典の推移と前橋まつりの関係】

行事名	祇園祭礼	前橋大祭	前橋まつり
拠点神社	連雀町八坂神社 ※明治末期に八幡宮に合祀	八幡宮	八幡宮 ※神社の祭礼ではなくなったが、ルーツである八幡宮自体は現存
時代	江戸中期～明治	大正～戦前	戦後（昭和 34 年（1959））～
実施場所 内容	各町が曳き出す祭礼屋台や祇園山車が、連雀町通りや本町通りに集結	各町が曳き出す花車（山車）が中心商店街一円を巡る	各町の山車が各町内を巡行＆中心商店街を巡行後、立川町通りで山車行列

【神輿渡御の推移と前橋まつりの関係】

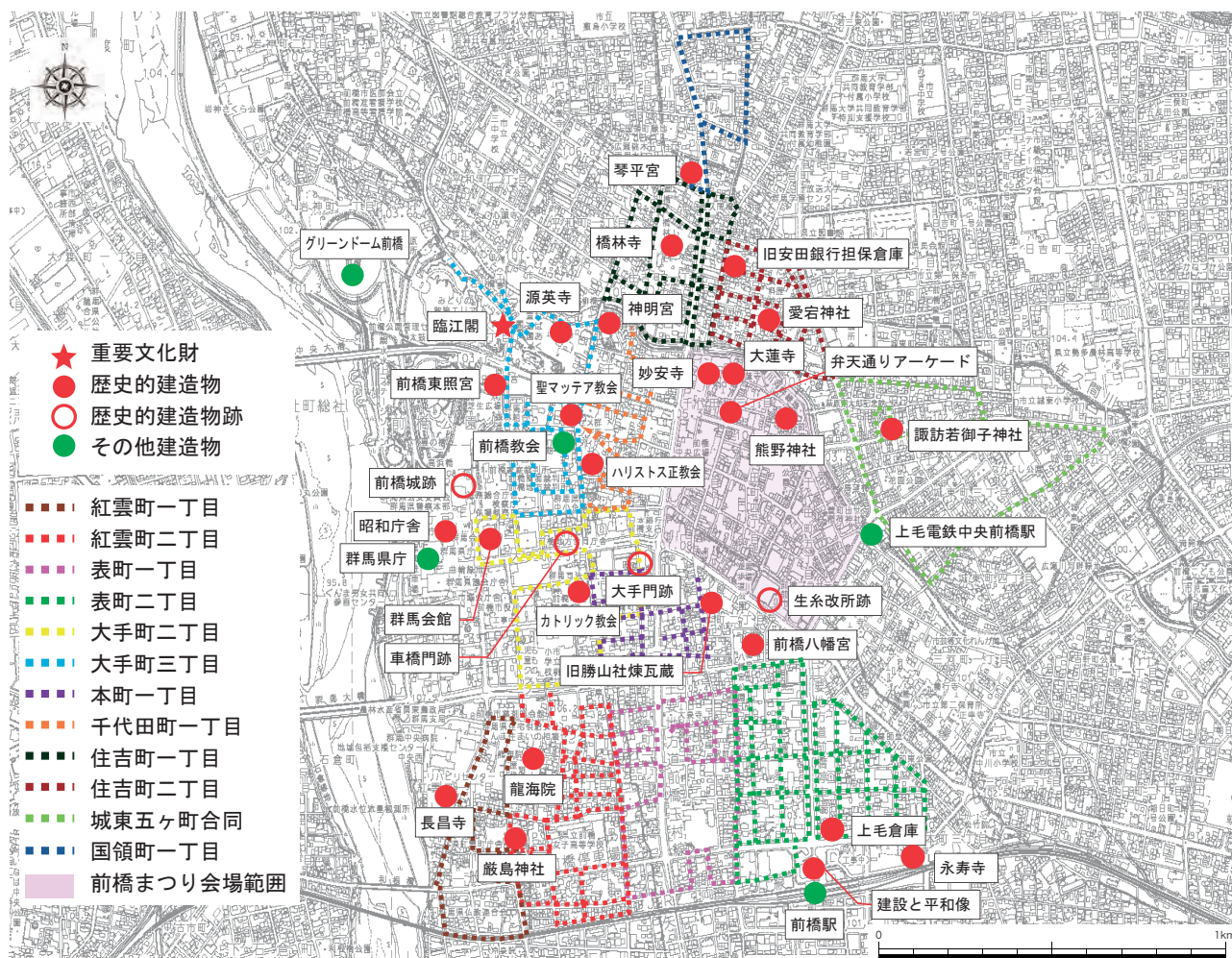
行事名	天王神輿	各社の神輿	前橋まつり
拠点神社	横山町八坂神社 ※明治末期に小石神社に改称、戦後、郊外に移転し、一部の祭礼を熊野神社に継承	八幡宮、神明宮、熊野神社	八幡宮、神明宮、熊野神社 ※担ぎ手は自治会や愛好会に変化した。横山町八坂神社以外はルーツである各社が現存
時代	江戸末期～戦前	不明～戦前	戦後（昭和 34 年（1959））～
実施場所 内容	当初は天王神輿が本宮まで巡行、明治中期から中心商店街一円の巡行に変化	各社の神輿が、鎮守する各町内を巡行	自治会や事業所、愛好会が担ぐ神輿が中心商店街を巡行後、立川町通りで連合渡御

イ 山車行列と神輿連合渡御

【山車の巡行】

各町の山車は、町内を巡行する日とまつり会場を巡行する日の二日間にわたって曳き出される。初日の町内巡行では、老若男女が山車につながれた綱を引き、各町のランドマークを経由しながら路地を練り歩く。以下では、各町の巡行ルートのうち、ルート上に歴史的建造物が位置しているものについて一部紹介する。

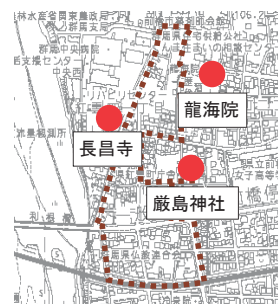
〔各町の巡行ルート〕



〔ルートの一例〕

○^{こううんちょう}紅雲町一丁目・二丁目

紅雲町は、かつて前橋藩領の「紅雲分」^{こううんぶん}であった地域で、当時の地名が現在の町名に継承されている。一丁目・二丁目ともに町内巡行は JR 両毛線までを範囲とし、ルート上には滝川一益ゆかりの長昌寺や、酒井氏の菩提寺である龍海院、水の神である市杵島姫命^{いち きしまひめのみこと}を祀る巖島神社^{いつくしま}などがある。





紅雲町一丁目の山車



紅雲町二丁目の山車



龍海院



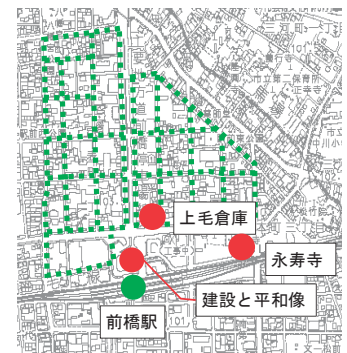
長昌寺



厳島神社

○表町二丁目

表町二丁目は、明治時代には士族屋敷が建ち並んだ場所で、現在は戦後復興で整備された前橋駅前通りを中心に東西に住宅街が広がる。山車は整然とした街区の中を巡行し、ルート上には JR 前橋駅前に佇む「建設と平和」像、生糸のまちを象徴するレンガ倉庫である上毛倉庫、松平家家臣の禄配給所であった永寿寺が見られる。



表町二丁目の山車



JR 前橋駅



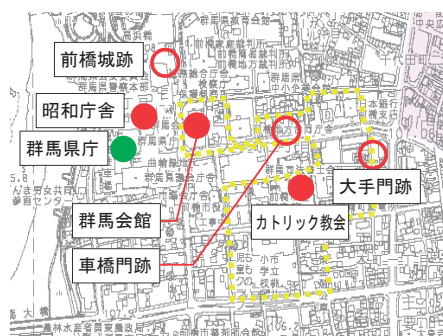
上毛倉庫



永寿寺

○大手町二丁目

大手町二丁目はかつての城内にあたり、巡行ルートには車橋門跡や大手門跡、風呂川などの城の遺構が見られる。山車の上には酒井氏4代忠清扮する甲冑武者が構え立つため、県庁を背景に巡行する様はあたかも城内からの出陣を想起させる。このほか、ルート上には群馬県庁昭和庁舎や群馬会館、空襲を免れたカトリック教会の聖堂（国の登録有形文化財・平成13年（2001））など、昭和初期の歴史的資源も数多くみられる。



大手町二丁目の山車



車橋門跡



大手門跡



昭和庁舎



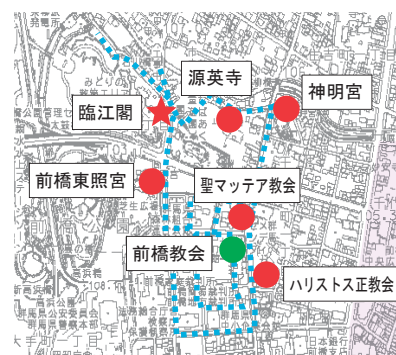
群馬会館



カトリック教会

○大手町三丁目

大手町三丁目は城内と城下町をまたぐ範囲にあり、巡行ルートには、本市を代表する建造物である臨江閣や前橋城跡（前橋城の土塁）のほか、城の鬼門除けである神明宮、酒井氏が開基した源英寺、松平氏の移封とともに本市に移転した東照宮がある。また、巡行ルート東端の縦の道路は「教会通り」と呼ばれ、沿線には「生糸のまち」の歴史や本市の社会福祉の成り立ちと関係の深い前橋教会、聖マッテア教会、ハリストス正教会が建ち並び、キリスト教会群の中を山車が巡行する独特の風景を見ることができる。



なお、教会通りから南西に下った長昌寺には、仏寺であるにもかかわらず、前橋教会の会員で本市の社会福祉の基礎を築いたとされる宮内文作らのクリスチャンが眠る墓が多数見られる。こうした宗教の近接・混在は他都市にはない本市独特の現象で、歴史研究者らによれば、義理人情に厚く、あまり理屈を言わないとされる上州人（群馬県民）気質と、何事にも寛大・寛容な市民性によるものであると分析されている。



大手町三丁目の山車



臨江閣（別館）



前橋城跡



神明宮



源英寺



東照宮



日本基督教団前橋教会



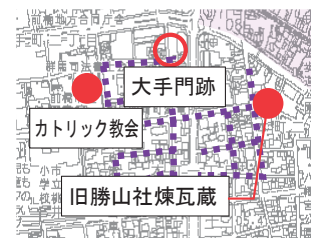
聖マッテア教会



ハリストス正教会

○本町一丁目

江戸時代に連雀町と呼ばれたエリアを含む本町一丁目は、かつては八幡宮の門前町としてにぎわい、現在はオフィスや住宅が多く建ち並ぶ。巡行ルート上では、ランドマークのいくつかが大手町二丁目と共通しているが、焼き過ぎ煉瓦が使用された旧勝山社煉瓦蔵が際立つ存在となっている。



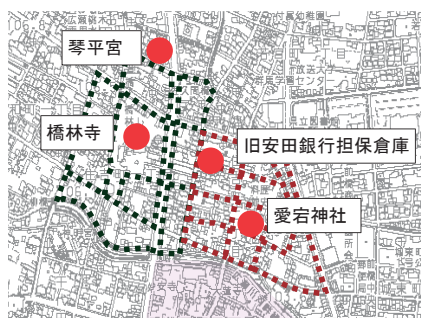
本町一丁目の祇園山車



旧勝山社煉瓦蔵

○住吉町一丁目・住吉町二丁目

住吉町一丁目・住吉町二丁目周辺は、かつての「細ヶ沢町」や「小柳町」にまたがる位置にあたり、双方ともに玉蘭や屑蘭を中心とする蘭市場が開かれるにぎやかな場所であった。両町ともに、山車は「生糸のまち」を象徴するレンガ倉庫の一つである旧安田銀行担保倉庫の脇を通り、一丁目は厩橋城主・長尾氏の時代に由来する橋林寺の脇を巡行し、二丁目は夏越のお祓いである「茅の輪くぐり」が行われる愛宕神社の脇を巡行する。



住吉町一丁目・二丁目の山車



橋林寺



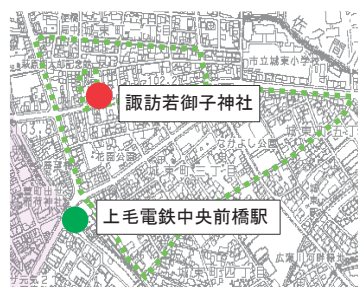
旧安田銀行担保倉庫



愛宕神社

○城東町五か町

かつて城下町であったエリアを含む城東町は、一丁目から五丁目までの五か町が合同で山車の運行を行う。山車は諏訪若御子神社から出発し、上毛電気鉄道中央前橋駅の横を通過しながら各町内を巡回する。



城東町五か町合同の山車



諏訪若御子神社



上毛電気鉄道中央前橋駅

○国領町一丁目

国領町は江戸時代からの地名が残る町で、明治 22 年（1889）に現在の国道 17 号である渋川への新道が開通してから大きく発展し、製糸業最盛期の頃には、前橋を代表する大型製糸工場が建ち並んだ。山車は、かつて旅人から崇敬を集めた琴平宮の脇を通過する。



国領町一丁目の山車



琴平宮

二日目は、各町の山車が各々のルートでまつり会場の中心部にある集合場所に参集する。主会場の北側にある町は、大蓮寺の門前である弁天通りアーケードを南進し、南側の町は中央通りアーケード（桑町通り）を北上して集合場所へ向かう。その後、列をなして横山町通り～千代田通り～立川町通りへと巡行し、立川町通りに全ての山車が揃うと、各山車の奏者が一斉に和楽器を打ち鳴らす「山車行列」へと移行して終了となる。なお、この行事には、かつての祇園祭礼の様子を再現する意味が込められている。



各町の山車が勢揃いする山車行列



昭和 43 年（1968）の山車の巡行

【神輿の巡行】

神輿の巡行は、かつては各神社の氏子や関係者が担ぎ手となるのが一般的であったが、前橋まつりでは事業所や自治会、神輿愛好会などのさまざまな団体が担ぎ手となる。その中でも、戦前に盛んに行われた神輿渡御の流れを汲む八幡宮の神輿は本町二丁目自治会、神明宮の神輿は豎町（千代田町三丁目）自治会が担ぎ手となり、出発前はそれぞれの社で安全祈願祭が執り行われる。また、熊野神社の神輿は神輿愛好者で構成する千熊翔鳳会が担ぎ手であるが、まつり当日は、熊野神社の参道敷にまつり本部が設置されるため、神社の裏通りを経由して弁天通りに設置された仮宮から出発し、地元の名刹である妙安寺前で神輿を高々と指し上げてから集合場所へ向かうのが通例となっている。

初日・二日目ともに、各団体がまつり会場を巡行し、立川町通りに全ての神輿が出揃うと、前橋^{とび}鳥伝統文化保存会による木遣唄に続いて、各団体が神輿を一齐に担ぎ上げる勇壮な「連合渡御」が行われて終了となる。戦前の様子を知る中心商店街の古老によると、連合渡御で荒々しく神輿が揺さぶられる様子は、かつて「暴れ神輿」で名を馳せた横山町八坂神社の天王神輿の揉みっぷりを彷彿とさせるという。



本町二丁目の神輿
(前橋八幡宮 HP より)



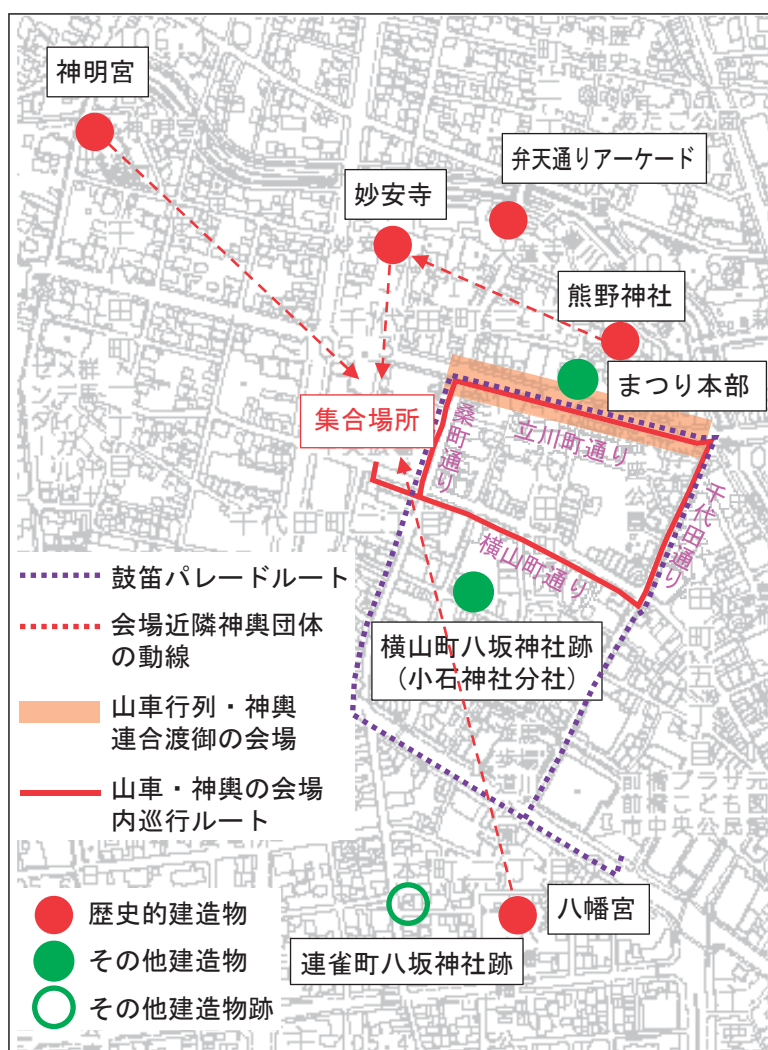
豎町の神輿



千熊翔鳳会の神輿



まつりのクライマックスを飾る
神輿連合渡御



(4) まとめ

本市の都市部において、市を挙げての伝統行事として江戸時代に由来するものは初市まつりが唯一である。また、前橋まつりは戦後復興の一環ではあるが、街なかの伝統祭礼であった祇園祭礼と神輿渡御を組み込んだ市民参加型のイベントとして、いまや本市を代表する伝統行事となっている。

これらに共通するのは、行事そのものに本市を象徴する歴史観が組み込まれ、歴史的経緯のある場所が舞台となっている点にある。

例えば初市まつりは、城下町の時代（関東の華）を起源としながら製糸業最盛期（生糸のまち）に「だるま市」へと変化した経緯があり、主会場は城下町の時代から続き、戦後復興を象徴するけやき並木（復興の心意気）である「本町通り」が舞台となっている。前橋まつりでは、城下町時代（関東の華）からの伝統祭礼を「山車・神輿の巡行」の形で再現し、戦後復興の機運醸成（復興の心意気）を意図した市民総参加の理念は、「鼓笛パレード」や「だんべえ踊り」などの現代的な催しに継承さ



市民総参加が体现される「だんべえ踊り」

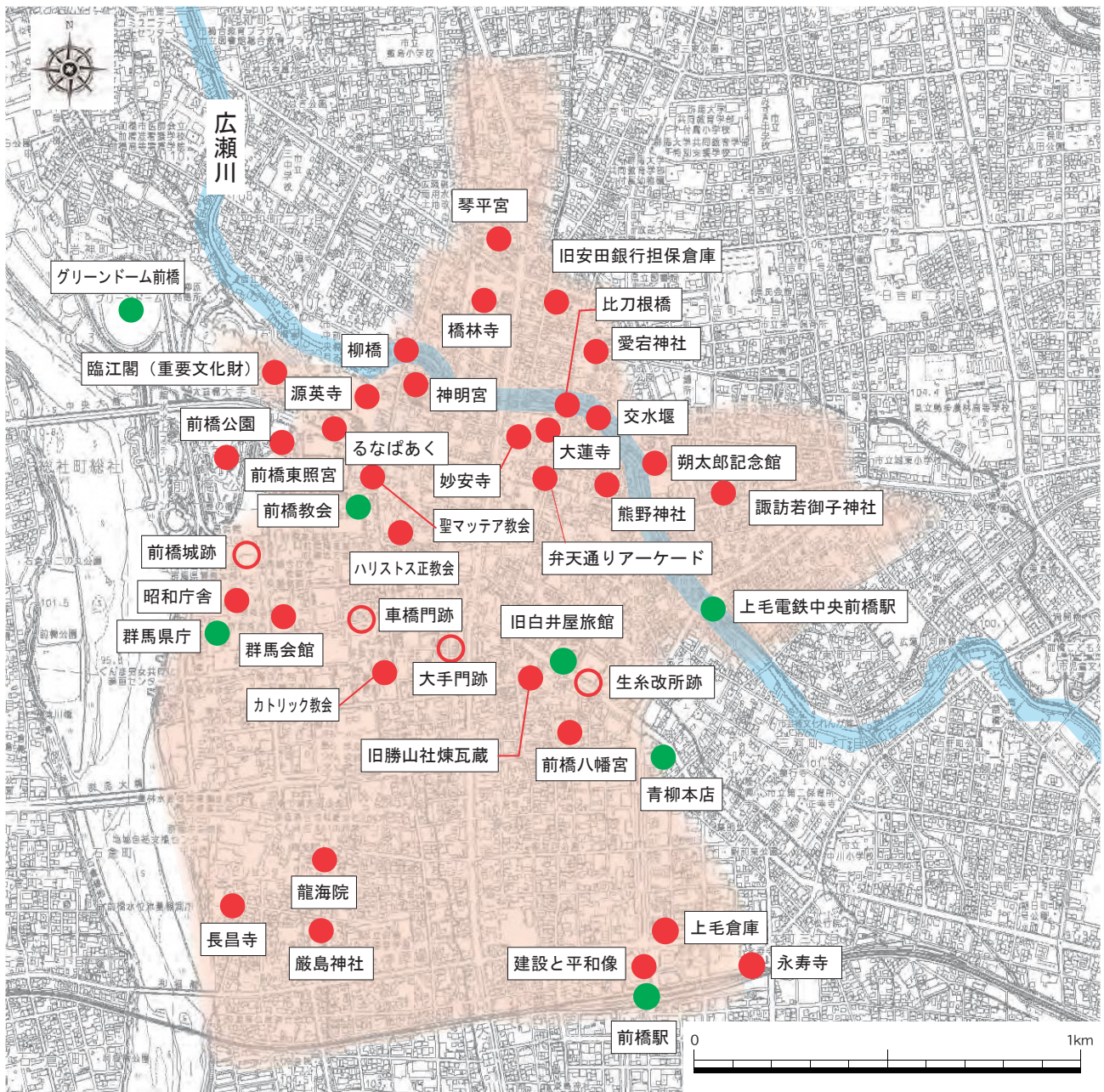
れ、それらは製糸業最盛期（生糸のまち）に繭市場通りと称された「立川町通り」で展開されている。

このように、初市まつりと前橋まつりは始まった経緯こそ異なるが、それぞれ「関東の華」から「生糸のまち」への変遷を背景とし、「復興の心意気」に支えられた行事であることが分かる。

前橋市民の目線では、毎年、何の気なく見かける光景であるが、新年の風物詩であるダルマにも、地域の路地を練り歩く山車にも、威勢よく揉まれる神輿にも、本市の歴史的な歩みが刻まれている。これらは、将来に渡って維持向上するべき本市固有の歴史的風致であるといえる。

	初市まつり	前橋まつり
時期	1月9日の単日	10月第2土日の2日間
起源	江戸時代（酒井重忠の時代）	戦後（昭和23年（1948））
範囲	中心商店街一円	中心商店街及び近隣自治会一円
主会場	江戸時代から続き戦災復興でけやき並木となった本町通り（国道50号）	製糸業最盛期の時代に繭市場通りと称された立川町通り
特徴	江戸時代からの伝統行事が製糸業最盛期に「だるま市」へと変化	伝統祭礼であった「祇園祭礼」と「神輿渡御」の要素を取り込んだ市民参加型の行事
風情	・寒空に映えるダルマや縁起物 ・街なかを練り歩く市神の行列 ・値切りを巡る掛け声の応酬	・響き渡る鼓笛パレードの音色 ・連合渡御や山車行列の熱気 ・路地を練り歩く各町の山車

I - 1 街なかの伝統祭礼にみる歴史的風致の広がり



凡例



街なかの伝統祭礼にみる
歴史的風致の範囲



歴史的建造物



歴史的建造物跡



その他の建造物